読書

お料理上手と思われる 持ちより＆さし入れレシピ2

馬場　香織著

人間関係は食事を共にすることで円滑になる場合が多い。パーティーで、人々が会話を楽しみながら会食するのは、そのためもあるだろう。

特に、気の置けない友人同士ならば、互いに手作りの料理を持ち寄り、さし入れすれば、その料理を通して会話もはずむというもの。

本書は、そんな時に、簡単に、しかも、おいしく作れる和洋中のレシピをビジュアルに紹介している。

見ているだけで、自分でも作ってみたいと思わせるものがある。

（メディアファクトリー　1260円）

日本のナイチンゲール

澤村　修治著

図書新聞　1890円

従軍看護婦たちの近代史

8月のテレビは、恒例の「日中戦争」「太平洋戦争」ものが目白押しとなる。

その中のひとつ。戦争期に「従軍看護婦」だった女性が、戦争直後に、再び、赤紙の召集令状を受け取る。

集合場所は博多港。何故だろうと思いつつ、とりあえず現場へ急行する。終戦直後、満州に取り残された民間人の引き揚げはまさに地獄の逃避行であった。

特に女性は筆舌に尽くし難い酸鼻を極める体験を強いられる場合も多々あった。その結果、彼女らは「不法妊産婦」と呼ばれ、堕胎が非合法だった当時、福岡市内の幾つかの療養所などで、密かに中絶手術が行われた。

厚生省の密命であった。この手術に「従軍看護婦」がどうしても必要だった。テレビでの彼女たちの証言によると、当時、麻酔薬が皆無だったので、麻酔なしの手術だった。

手術台に横たわる女性の両手を2人の「従軍看護婦」がしっかり握る。手術の開始から、彼女は悲鳴も泣き声も上げず、ただ「従軍看護婦」の手が折れるのではないかと思うほど力を入れるのだ。手術が終わると、そっといなくなる。

ところで、本書によると、昭和14年の陸軍大臣通達によって、日本赤十字の「救援看護婦」が、兵役義務のないのに赤紙を受け取る「従軍看護婦」となった。

彼女たちが携帯する手帳には「軍人勅語」が記されていた。

そもそも、日本赤十字社は、1887年、佐野常民らが起こした博愛社を日本赤十字社と改称し、西欧王室の慈善事業に倣って、篤志看護婦人会が創設された。

当初は、上流社会の女性たちが中心だったが、やがて全国規模での救援看護婦支部が生まれた。日清、日露は主に内地勤務、第1次大戦期には青島、満州事変以降、彼女たちは「戦場の看護婦」となり、戦地で戦死ないし戦病死した人数は、なんと1118名におよぶ。

「その献身的な働きと悲劇的な運命は、（略）忘れてはいけないのである」というのが巻末の、重い言葉である。

評論家・阿久根利具

渡来の古代史

上田　正昭著

角川選書　1890円

日本の国づくりに貢献

古代史が専門でありながら、著者の問題意識が常に今日的なのは、全ての歴史は現代史であるという歴史学の視点が明確だからだろう。中国、韓国との関係が厳しさを増すにつけ、著者の見識に学ぶところは多い。

例えば、仏教公伝は538年説（『上宮聖徳法王帝説』など）と552年説（『日本書紀』）とが知られているが、著者は日本との関係が最も深い「百済に「聖王26年」説があることから、548年説を取っている。聖明王が欽明天皇に仏像などを贈呈したのは、布教というより、唐と新羅の脅威に対して、倭の軍事協力を得るためであった。ちなみに、朝鮮三国への仏教伝来は高句麗が372年で最も早く、百済が384年、新羅には528年に高句麗から伝えられている。

興味深いのは、日本のように仏教を受け入れるべきかどうかの崇仏論争が起こったのは、三国のうち新羅だけだったことだ。

それは当時、新羅と日本が中国の冊封体制に入っていなかったからだった。

日本が律令制に基づく中央集権国家づくりを急いだのは663年に白村江の戦で唐新羅連合軍に大敗したのが大きなきっかけだった。

だが、天智天皇が大津に都を遷したのは、単に防衛上の理由だけでなく、日本海を介した高句麗との古来からの交流が背景にある。

日本に仏教が浸透するのは、親鸞に和の教主と呼ばれた聖徳太子から。その太子に仏教を教えたのは高句麗僧の慧慈である。その意味で、天智・天武の仏教を基本理念とした国づくりは太子から始まると言える。

さらに、東大寺に華厳経を伝えたのは新羅僧であり行基や空海に見られる僧侶の社会活動も新羅僧にならったところが大である。インドの仏教は中国で道教・儒教と習合し、それが朝鮮を経て日本に伝わった。

仏教公伝以前にも、4世紀から仏教を持った渡来人が日本に定着している。仏教だけを見ても、日本の国づくりに渡来人の果たした役割は大きい。

高嶋　久

新刊

『物語　朝鮮王朝の滅亡』

金　重明著

朝鮮では17～19世紀にかけて、朴趾源などの実学者たちによって、新しい世を準備する構想が発表され、近代化が目指された。

しかし、列強ひしめく中でそれは挫折し、朝鮮は日本の植民地になった。

英祖・正祖の時代から大韓帝国の滅亡まで、過酷な時代とそこに生きた人々を描きながら、朝鮮と明治日本の関係の実像にせまる。エピソード満載の歴史物語。（岩波新書　861円）

『言霊とは何か』

佐佐木　隆著

古代日本人は、ことばには不思議な霊威が宿ると信じ、それを「言霊（ことだま）」と呼んだ。この素朴な信仰の実像を求めて、『古事記』『日本書紀』『風土記』の神話や伝説、『万葉集』の歌など文献を丹念に渉猟（しょうりょう）する。「言霊」が、どのような状況でいかなる威力を発揮するものだったのか、実例を挙げて具体的に検証していく。近世の国学者による理念的な言霊観が生み出した従来のイメージを覆し、古代日本人の信仰を描

気になる話題

知られざる実態が明らかに

剣術修行の旅日記